

## 柳父章アーカイヴス

### ホームページ コラム集

#### はじめに

2018年1月に逝去された本学会名誉会員の柳父章先生は生前ネット上に「柳父章の最近の仕事です」というタイトルのホームページを開設されていた。先生の没後、このホームページは閲覧不能になっていたが、Internet Archive を利用して残されていたページをサルベージした(リンク先のデータもかなり残っていた)。もちろん失われたデータも多い。写真はほとんど残っておらず、残っていても変形していたり、説明と違うものが入っていたりする。今回、復元できたコラムに柳父先生のパーソナル・コンピュータ内に残されていたファイルを加え、ご遺族のご同意のもと、柳父章アーカイヴス「コラム集」としてここに収録した。

ホームページ上に残された記述から判断すると、ホームページの開設は 1999 年ごろだが、本格的に活用を始められたのは 2002 年 3 月のようなようである。2005 年にはあるブログで、「日本で個人ホームページをもつ最高齢研究者」のひとりに数え入れられたこともある。

トップページでは新しく出版されたご著書や投稿された論文の紹介、ご著書をとりあげた書評の再録、海外におけるご著書の出版翻訳、学会や講演会、シンポジウム、ラジオ講座出演など、その折々の活動報告をされた。翻訳について長めの論文を掲載されることもあった。

また「日本を考える」というタイトルでコラムを設け、「そのときどきの私の意見を、この欄で述べていただくことに」されていた。「仕事から堅い話ばかりで恐縮ですが、翻訳とか、比較文化に関心のある方、どうぞご覧ください」とあり、おもに時事問題をとりあげて自説を展開された。内容は多岐にわたるが、いま読むと未来を洞察する鋭い指摘の数々があることに驚かされる。たとえば「バブルがはじけて、土地神話が崩れたということは、限られた島国の中に強固な定着文化を築いてきた歴史の転換期の兆しではないか。この島国にも、さまざまな国の人々がやってきている。そして大和の民もまたさまざまな国へでかけている。地球上各地で、移動する民が、定着する文化の民を脅かし始めている。移動する民の文化の時代は、すでに始まっている」(「移動する民の時代」2002年12月2日)は、まさに移民問題で揺れる EU を、あるいは改正入管法施行前夜のわが国の混迷ぶりを予言している。

コラムのひとつ(「空気を読まない者」2007年10月8日)で、ご本人が「私じしん評論家を名乗ることがあるが、評論とは、危険なことを発言する仕事である、と心得ている」と述べられているように、先生のご意見の一部にはかなり過激なものもある。その一方で、先生の文章にはどこか純真で、人間を信じておられるように見受けられるところもある。先生が晩年にご自身の著作のなかで重要な一冊と考えられていたひとつに『秘の思想 日本文化のウラとオモテ』(法政大学出版局、2002

年)があるが、先生はご自分のまわりにいる人間たちにも「ウラとオモテ」があることには気づいておられなかったのではないかと。

**柳父 章** の 最近の仕事です



ハ、ハンガリーの中世教会遺跡

**『秘の思想』と題する著書を出しました。** 2002年、法政大学出版局から、¥2500 です。  
「秘すれば花、秘せずは花なるべからず、…この秘といふことを顕せば、させることにもなきものなり…」という、世阿弥の言葉から発展させた翻訳文化論です。

**私の著書の韓国語訳が二冊出ています。**  
李ヨソク先生による『**『秘の思想』とはなにか!**』と徐慧瑛さんによる『**『秘の思想』の韓国語訳**』です。これは、出たばかりで、昨年4月5日、『東亜日報』で、かなり大きく紹介されていました。

日本哲学史フォーラム『日本の哲学第4号』(昭和堂、2002年12月刊)に『**『秘の思想』と題する論文**』を書きました。**日本語の主語は、明治期に、翻訳でつくられた、**という、私にとって大事な主張です。  
このテーマをふくらませて、一冊の本にまとめました。近く出る予定です。

私の文章からは、よく大学入試などに引用されるのですが、今年も二度ほど引用された文を、参考のために、**その出題の箇所を、引用しておきます。**

沖浦和光、寺木伸明、友永健三編『**アジアの身分制と差別**』(解放出版社、八月刊)に、『**キリタン弾圧と部落差別**』という論文を書きました。

10月21日から、ハンガリーへ行ってきました。「ISISンフォーリー」という学会に参加して、10日あまり、各国の入々の発表を聞いたりしてきました。私も、翻訳論を中心に発表しました。翻訳による意味のズレについては、かなり反響がありました。私の『**カセット効果**』説は、人々に分かりにくかったかなと思いました。  
ブダペストはヨーロッパの古都の、重厚な雰囲気、学会会場のデコレーションは、静かでない町でした。

Internet Archive に残されていたページのスクリーンショット。  
(写真が説明と違っているがアーカイブ化のためと思われる。)

コラム「日本を考える」第24回までは柳父先生ご自身がリストを作成されていた(2006年2月)。リストのうち、第19回、第20回、第21回の3本はリンク先に見つからなかった。他方でコンピュータ内からは、このリストに記載されていないファイルも見つかった(「美人の顔」2002年9月14日)。なんらかの理由でリストからはずされた可能性もあるので、「番外」とした。またトップページ(2010年7月29日)に言及はあるが、復元できたホームページにもコンピュータ内にも見つからなかったコラムが4本ある(「日本はアメリカの植民地か?」「あの戦争で」「証拠はないということ」「イジメた者が悪い」)。2006年以降のコラムはコンピュータ内に残されていたファイルを再録し、ファイルに記載されていた日付、あるいは確認できた最終変更日時順に掲載した。収録に当たっては体裁を統一し、段落は改行、段落頭に1字分スペースを設けた。本文にはいっさい変更を加えていない。発表年月日は先生ご本人が記載されているものを使用。ご自身の記載はないが、ファイルから最終更新日が特定できたものは、その日付を記した。

なお柳父先生は鳥取市の定有堂書店ホームページにもコラムを連載されていた。こちらは現在も閲覧が可能である([http://teiyu.na.coccan.jp/idea/yanabu\\_back.html](http://teiyu.na.coccan.jp/idea/yanabu_back.html))。(水野的・北代美和子)

## 柳父章

### ホームページ コラム集「日本を考える」

日本文化について、外側から考えていきたいと思って、こういう題をつけました。

外側というのは、異文化との比較という視点です。

テーマは、そのときどきの時事的な話題を取りあげたり、遠く歴史を遡っていったり、随想風に自由に選んでいきたいと思っています。

最低でも、月に一回は更新します。

ご感想、ご批判など、歓迎します。

よろしくお付き合い下さい。

#### 第1回 (2002年8月20日) 触れ合い文化・ケータイ

ケータイは今やどんどん進化して、インターネットやショッピングはもとより、テレビ電話機能も当たり前になっている。なるほど便利だ。とくに若者たちを中心に、ケータイ無しには生活はない、みたいである。

しかし待てよ、便利だからケータイはこんなにも流行っているのか？——どうも逆ではないか。流行っているから、便利にされてきたのでないか。では、なぜ流行る？——人々は、手軽な触れ合いを求めている——その要望にこたえた器具の出現だった。友達同士、恋人同士、常時この器具を通じて触れ合っていたい。親は子供を確認、監視したいので、ケータイを持たせる。社会人どうしでも、どこにいて、何をしてるか確認したい、監視し合いたいので、相互にケータイを持つ。日本人はやはり「触れ合い」を求めている。しかしこの最先端のIT 器具のおかげで、結果として、新しい形の「触れ合い」を作りだしている。そして、遂にケータイの触れ合いが、生身の触れ合いをしのぐようになっている。若者たちが連れ立って、どこかに腰をおろすと、それぞれが一斉に自分のケータイを取り出して見入るような光景がある。

この器具のおかげで、人々の「触れ合い」の領域は広まった。広まっただけではない。いつでも触れ合っている。そして、その分だけ、人が一人でいられる領域と時間とは狭められている。ケータイを持つということは、プライバシーを削るということだけれど、もともとプライバシーなんて物はなかったのだから。削られるのは意に介しない。一人ではいられないから、ケータイにすぎる。改めて孤独になる。ついさっきも、十六歳少女が、ケータイで知り合った男に殺されたらしい。孤独だからケータイにすぎるのか、ケータイにすぎるから孤独になるのか。

ケータイを持っていない者の立場から見ると、コミュニケーションの手段は、ほかにも充分ある。必要な情報が、やり方次第ですぐに手に入る。便利な時代になった。そこでたとえばアメリカでは、会社に出勤しないで仕事をする人が増えているという。インターネットは抽象的な人間関係をつくり、人の触れ合いを減少させる方向に動いているようだし、ケータイを持っている人は、むしろ日本より少ない。

IT 化の当然の流れは、人間関係の機能化、抽象化のはず、と思っていたが、日本ではどうやらその逆の方向に、「触れ合い」の増幅という方に向かっている。やはり文化の根は深い。日本のケ

一タイは、これからもますます触れ合い文化を強化していくのだろう。

### 【番外】(2002年09月14日) 美人の顔

美人はなぜ美しいのか。考えてみると不思議なので、結局私はこう考えた。女の人の顔をたくさん重ねていくと、標準的な顔かたち、つまり美人の顔になるだろう、と。つまり、美人には申し訳ないけれど、あれは美しいのではない、多数派の典型に対する感情を、人は美しいと言うのだ、と。このことは、かつて毎日新聞にちょっと書いたことがある。その後誰かが、同じ趣旨で写真で実験をして、同じような結論になった、ということを読んだ覚えがある。

このことを今思い出したのは、つい先日、「ユニーク・フェイス」のグループの人の話を聞いたからだ。このグループは、顔に、生まれつき、あるいは事故で傷や変形があって、差別や偏見に悩まされている人たちだ。なぜ差別されるのか、私の「美人論」からすると、要するに、多数派に対する「少数派」だから、とすることができると思った。同じように、左利きの人は差別され、いじめられることがある。左利きは、右利きに対する「少数派」だからだ。「右」のことを英語で right(正しい)というのは、そのことを表している。多数派は「正しい」、「美しい」というわけだ。

およそ差別の本質は、要するに「少数派」である、ということができるように思う。部落差別も、外国人差別も。日本人は、伝統的に、多数派、少数派について、とくに敏感なようで、それだけに、少数派差別が厳しいようである。

### 第2回(2002年9月20日) 少数説

学説というのは、多数決で決まる、そう言うと驚く人もいるようだけれど、本当である。多数決というのは、学会の多数決である。自然科学の学説でももちろんそうで、相対性理論だって、今でも反対している研究者がいる。つまりは少数説があるということだ。ダーウィンの進化論には、今でも有力な反対説がある。

私は学生に講義するとき、よく少数説や、自分一人の説を取りあげる。中学校や高校では少数説は教えるとはいけないのだけれど、大学生は自分で判断できるはずだから、と言って、多数説、少数説を並べて話す。その後には、感想を書いてもらうことにしているのだが、私の説への賛成は、だいたい半々である。

そんな少数説の一つ、秀吉がキリシタンを弾圧するようになったのは、女の子に振られたからだ、という説がある。英雄色を好むというわけだが、独裁的権力者には、古今東西こういう人がいっぱいいる。秀吉の取り巻きにゴマスリがいて、施薬院全宗というお坊さんだけれど、九州で素人の美人数人に、秀吉のところへ来ないか、と誘ったら、この娘たちはキリシタンで、デウスに仕える身で、そんなみだらな事はできません、と断った。封建時代の権力者に、妾になれと言われたら、喜んでか嫌々ながらも、断ることなど考えられなかったような時代の話である。全宗はびっくりしたし、怒った。その夜、ポルトガルのワインを飲む席で、秀吉にそのことを報告した。秀吉は激昂した。翌日、キリシタン宣教師追放の命令が出された、というのである。宣教師フロイスの報告にそう書いてある。

私はこの報告はもっともで、これが原因でキリシタン弾圧は始まったと思うのだけれど、しかし歴史研究者の多数説は、女の子に振られたのは事実としても、秀吉のキリシタン弾圧は、国家の大計に従って当然出されたものだ、という。講義でこの話をして、感想を書かせると、女の子はフロイ

ス報告に共感するのが多いようだが、男の子は国家の大計説支持が多いみたいである。

### 第3回 (2002年10月15日) 神の子たち

上の写真は、十数年前、インドを訪ねたとき、ニューデリーの公園で路上生活をしている子供と一緒に撮ったものである。十歳の女の子が、五歳の弟をいつも抱いていた。

この写真を、比較文化の講義で、学生たちに見せたことがあったが、これを見た学生の中に、反発した意見があった。「金持ち日本人が、貧しい子供と並んで、ヒューマニズムをひけらかしているようで嫌らしい」というような批判だった。なるほど、若者らしい鋭い感覚、と思った——が、ここで私の意見がある。

世界には、私たちよりはるかに貧しく、苦しい生活をしている人々がいっぱいいる。そういう人たちのために何かしようとしたり、考えたりするのには、その人たちと同じ生活をしなければならないのか。そういう意見は確かにある。革命家の意見である。しかし、世の中は革命家だけでは動かせない。差別はいつぱいにはなくなる。世の多数の人々が、今の生活のままで、そのままできる範囲のことをすること、それが大事ではないか。ベネトンという有名な贅沢品をつくる会社が、その広告にやはり貧しい人々の写真などを載せたときも、賛否両論があった。贅沢な服装のままで、戦争孤児に共感できること、私はこれに賛成する。それを潔癖に否定しては、ヒューマニズムの裾野は広がらない。

インドは歴史は古く、その歴史が、ついその辺に生きているようなところであるが、また最新IT技術の先進国でもある。昔から大金持ちがスゴイ贅沢をしてきたが、他方、最底辺の貧しい人々もたくさんいる。カースト制というのはよく知られているが、実はそのカーストよりさらに下の階層の人々が、人口の一割以上いる。ガンジーは、この人たちをハリジャン、すなわち神の子と呼んだ。今日ではふつうダリットと言われている。写真の子供たちがそうだ。

インドは、あらゆる面で、日本などとは違った多彩な文化の国で、興味深い。街の通りを牛が悠然と歩いている。そこら中に何やら落とす。それで人間様も同じようにやっていたりする。外国人のお客さんはびっくりして、もう二度と来ないという人と、また来ようという人に分けられると言われている。少し慣れると、人間たあこんなもんだ、と悟った気になるから面白い。

### 第4回 (2002年11月10日) 拉致問題を考える

拉致問題が連日テレビや新聞などで大きく取り上げられていて、一步も譲るなという強い意見が主流になっている。その背景には明らかに世論がある。

一方、北朝鮮側の言い分では、とくに植民地支配時代の日本帝国主義の圧制に比べれば、拉致問題は小さいことだと言う。この反論には筋が通っていて、とくにある年代以上の日本人の痛いところを突いている。日本では目下のところは少数意見だが、たとえば『あえら』の田岡さんも、この反論と同意見である。しかしまた、過去のことと、現代のことを同列に扱うな、という日本側の意見もある。

拉致された人々の悲しみには、私も心から共感する。しかし、ここでは、文明論の一研究者としての立場から、この問題を冷静に考えてみたい。

教室で学生たちに意見を聞いてみると、拉致問題については、意外に反応が鈍いことに気付いた。これは世代の違いから来るのではないかと考えた。おそらく、この問題にいちばん敏感なの

は、四十代くらい以上の、拉致被害者やその両親と同年代の人々ではないだろうか。この世代では、拉致加害者を一途に憎む気持ちをもっとも強いだらう。そして、被害者の両親と同じくらいか、それよりやや上の世代では、かつての植民地支配時代の加害意識も重なって、複雑な心理になるだろう。

すなわち、一世代をだいたい二十年として、世代の上から順に、拉致の被害とともに、日本による加害を否応なく感じ取る取る人々、次に、もっぱら拉致の被害を強く感じ取る人々、そして次に、拉致被害の意識の弱い若い人々、となるのではないか。この若い世代では、拉致被害ばかりでなく、かつての植民地支配の加害意識も、もっとも弱くなっているだろう。

そしてさらに、もっと若い人々がいるだろう。現在の若者より一世代、約二十年若い人々、その人々は、まだ人間世界に現れはじめたばかりである。

今から七百年以上前、モンゴル帝国と朝鮮の連合軍は日本を侵略し、日本人を虐殺した。このホーム・ページのコラム欄に、かつて私は書いたことがあるが、その侵略の事実を責めたり、賠償責任を求めるような日本人は、今やいない。それは、「歴史」の事実だからだ。

いかなる残酷な加害、被害の体験も、やがて「歴史」となる。かつて、東欧革命の発端となったハンガリー事件のとき、哲学者サルトルは、ソビエト軍の弾圧への抗議文の中で、この悲劇もやがて忘れられるだろう、と書いていたが、そのことを、今鮮明に思い出す。

加害・被害の体験は、いつから「歴史」となるのか。私の考えるところでは、一つの境界線として、直接体験した人々が、すべていなくなった時、を考える。現在の寿命年齢からすると、それは、およそ五世代、約百年ということであろうか。

## 第5回 (2002年12月2日) 移動する民の時代

アメリカ大陸に西洋人たちがやって来た初め、現在のニューヨークのマンハッタン島を、原住民と交渉して、ウイスキー一瓶と、この島とを交換したという。この話は、土地の所有権とか、領土権という考え方の本質を反省させてくれる。

一般に、牧畜民は領土権の観念が乏しい。狩猟・牧畜のできるところがすなわち自分たちの土地ということになるからだ。それに対して、農耕民には土地が第一の財産である。土地に定着する文化の人々と、移動する文化の人々とが衝突すれば、土地に執着する人々の方が強い。世界の各地で、先住民が後からきた文明の民に圧倒されているのは、人数の多少ということももちろんあるけれど、土地に対する観念の違いも重要な原因になっているに違いない。北海道のアイヌが、大和に圧倒されているのもそうだろう。アイヌが今までどおり鮭を捕っていたら、そこは大和の土地だから法律違反ということになった。鮭を捕るのは当然の権利か法律違反か、という問題も、土地所有の観念のズレから起こったのだろう。

土地が財産であるという観念の空しさを、史上最初に見抜いたのは、一八世紀のルソーだった。土地に囲いをして、これが俺のものだ、と言う者が出現して以後、所有権とか、権力とかが生まれた、というのだった。

大和の民は、この島国に農耕の民として定着して以後、とりわけ土地への執着を育ててきた。土地はすなわち最高の財産であった。

バブルがはじけて、土地神話が崩れたということは、限られた島国の中に強固な定着文化を築

いてきた歴史の転換期の兆しではないか。

この島国にも、さまざまな国の人々がやってきている。そして大和の民もまたさまざまな国へでかけている。地球上各地で、移動する民が、定着する文化の民を脅かし始めている。

移動する民の文化の時代は、すでに始まっている。

## 第 6 回 (2003 年 1 月 20 日) 正義の味方！

「正義の味方」と聞くと、日本のある年配以上の人は、月光仮面を思い出すのではないか。危うし！というところで、マントを翻し、スクーターに乗って颯爽と現れ、悪者をやっつける。実はこれは、日本お得意の翻訳文化であった。貧しい時代だったから、スクーターに乗っていたのだけれど。

その原型は、たとえば、怪傑ゾロである。黒いマントを翻し、馬に乗って颯爽と現れ、悪者を十字に斬る、そんなアラン・ドロンを映画で見た覚えがある。あるいは、ご存知スーパーマンである。赤いマントを翻し、空を飛んで現れ、悪者をたちまちやっつける。

どういふものか、「正義の味方」はマントを翻して現れる。——というのは、さらにその原型があったのだ。

白いマントを翻し、胸に赤い十字のマークをつけて、馬に乗った集団が、イスラムの「悪」の本拠に乗り込んでやっつける。これは空想話ではない。史実であった。十字軍である。西洋人の「正義」という観念には、このイメージがどうもつきまとっているらしい。

ブッシュさんは、JUSTICE(正義)という言葉が好きである。この言葉を聞いたら、注意しないとイケない。その反対側には、EVIL(悪)がある。悪は殺さなければならない。正義と悪との二分法の世界観である。

いつかフランスのベルクさんに聞かれたことがあった。「正義という言葉は日本語にないですね。」と。そうだった。「正義」は翻訳語だった。

日本の伝統には、抽象的な観念によって世界を二分する考え方はなかった。まあ、いろんな時代があったけれど、中心を貫いていたのは、「和」の心ではないか。あっちももつとも、こっちももつとも、まあまあ、そう難しいことはお預けにして・・・、という精神である。

近年、日本外交の燦たる成果は、明石国連代表を中心とするカンボジア調停であろう。あれは「まあまあ主義」だった。明石さんは、次にはユーゴで調停活動したけれど、アメリカの横槍で、ミロシェビッチなんかと話しはできるか、というんで爆弾を落とし、明石さんは追い出されてしまった。これは残念だった。

## 第 7 回 (2003 年 3 月 18 日) 歴史は繰り返すのか？

今から 70 年前、1933(昭和 8)年に、国際連盟の常任理事国だった日本は、国際連盟を脱退した。脱退の通告文の中で、「連盟の多数国は、日本の東洋平和の理想を理解しない、」と言い、また「日本軍の行動は自衛権の発動である、」とも言っていた。

そして、その自衛のために、海を渡って、中国に大軍を送った。

日本に続いて、ナチス・ドイツも脱退し、国際連盟は崩壊し、やがて第二次世界大戦となった。

その 70 年後、国際連合の安保理の常任理事国のアメリカは、「国連安保理はその義務を放棄した、」と言い、また、「アメリカは自分たちの安全を守るために武力行使する権限を持っている、」

と言って、イラクへの武力攻撃の決定をした。

そして、その自衛のために、大海原を越えて、中東に大軍を送った。

国際連合は、その機能が無視されて、国連の外で、大規模な武力が発動されるという危機を迎えている。

国際連盟が崩壊したように、国際連合も崩壊するのか。

世界は、アメリカ一国の意志で、その武力で脅されて、あるいは、その顔色を窺いながら尻尾を振って(どこかの国の首相のように)、動かされるような時代になっていくのか。

あゝ、また子供たちが大勢殺された！！

#### 第 8 回 (2003 年 10 月 8 日) 明治維新でよかったのか

近頃、大日本帝国憲法を見直し、これをつくった明治維新政府のことを考えているうちに、いったい明治維新というのは、いいことだったのか、と思い返してみた。

尊皇攘夷側の維新政府ができていなかったら・・・、幕府軍が勝っていたら・・・、民主主義化は時代の流れだった。幕府側のスローガンは「攘夷」ではなくて「開国」だったし、福沢諭吉や、勝海舟のような人物もついていた。旧幕府側中心の政府ができていたら、少なくとも、天皇制はつくられなかったのは確かだ。

伊藤博文たちにとって、天皇制は、「尊皇」のスローガンの手前もあったし、それはオモテの形だった。明らかに、意識的な利用だった。オモテに中央集権制の強固なカタチをつくって、そのウラで、少数エリートが、能率的に近代化を図ろうとしたのだった。それは、一応成功だった。——しかし、そのカタチが、憲法制度となって、後々まで残った。維新の元勳たちがいなくなっても。

オモテに強力な天皇制を立て、そのウラで、宜しくできるといふこの体制が産んだ最大の不幸な結果は、軍閥政府の出現、侵略戦争時代への突入だった。

#### 第 9 回 (2003 年 10 月 18 日) 自殺は救いか

学生たちに、自殺について文章を書かせたら、およそ三分の一くらいが、自殺したいと思ったことがある、と書いていた。

日本は特に自殺が多い国らしい。中高年に多いことはよく取り上げられているが、子供や若者にも多い。なぜだろう。生活苦とか、イジメとかの理由は考えられるが、ここで私はもっと広く、文化論的なわけを考えたい。

日本では、伝統的に、自殺は、どちらかというどと賛美されてきた。キリスト教のような自殺を罪と見なす文化もなかった。切腹は武士の美德だった。近代になって、神風特攻隊やバンザイ突撃がそれを引き継いだ。

浄土信仰というのは、お釈迦様の教えとは無関係の、日本仏教の所産である。近世のキリシタンでは、殉教者が多く出たが、これはパライソ(天国)信仰とも言うべきで、ローマ教会の教える「殉教」とはかなり違って、浄土信仰に近かったようだ。

こういう自殺文化は、現代にも受け継がれていると思う。子供たちにも。たとえば、中学生がイジメで、屋上から飛び降りて自殺したというニュースがあると、ほとんど必ず、屋上の縁に、靴がキッチンと脱いであった、というようなことが報じられている。

このことは、まだ指摘した人はいないようだけれど、靴をキチンと脱ぐのはどういう意味があるのか。どういふときなのか。家へ帰るときである。すなわち、厳しいイジメのある世界などから逃れて、お母さんのいる家へ帰るのという意味、死はそのように理解されている。そこで救われるのだ。

私の知る限り、家へ帰るときに履き物を脱ぐのは、日本のほかには、韓国とインドネシアである。履き物を脱ぐ文化である。

死が救いであるという文化は、やはり悲しい。

#### 第 10 回 (2003 年 11 月 28 日) テロの定義は？

新聞やテレビなどで、連日のように「テロ」という言葉が使われているが、考えてみると、ずいぶん怪しげな意味の言葉ではないか。先入観を押しつける言葉遣いではないか。

たとえば、イスラエルとパレスチナで、お互いに殺し合っているのだが、片方は軍事行動で、もう一方は「テロ」と言われている。「テロ」の実行者は「犯人」と言われ、その行為は「犯行」と言われる。犯罪者と決めつけられる。軍事行動の兵隊は、決して犯罪者とは言われていない。これは、公平中立な立場からの言葉遣いだろうか。

イラクにおけるイラク人の、アメリカ軍などへの攻撃でも同様である。まるで正義の味方と犯罪者との対立のようではないか。ゲリラという戦い方は、ジャーナリズムでは認めないのだろうか。

#### 第 11 回 (2004 年 2 月 9 日) 「気違い」という言葉

「気違い」というのは、含蓄がある言葉のようだ。

著名な精神病理学者木村敏さんが語っているのだが、「気」が違うのであって、狂っているのではない。そして、その「気」というのは、「気分」や「気持ち」など、私たちが誰でも日常持ち合わせている「気」と共通なのだ。だから、「気違い」の「違った」「気」も、いわゆる正常な人々の「気」で理解できる、というのであった。(木村敏『分裂病の現象学』)

それは、「ああ、気が違っているんだな」と分かることができる。「精神障害」などという新造の翻訳語では及びもつかないような含蓄がある。

ネパールに行ったとき、たまたま現地で写真屋さんをやって居ついている日本人がいて、その息子さんの名前が「トラキチ」というのであった。それを聞いて、同行していた日本人は、いっせいに微笑んだ。写真屋さんはきっと関西出身だろう、と理解したのである。そしてきっとタイガース・ファンだ、ということも。

遠い故国への想いが、この一語から伝わってきた。

古くから伝えられた言葉には、いい意味も、悪い意味もある。悪い意味で使われた一面だけを見て、歴史のある言葉を片付けてはならないだろう。

#### 第 12 回 (2004 年 3 月 8 日) テレビ画面の表情について

顔の表情を通してその心を読みとることに、私は直感的な自信を持っていた。テレビの画面で見る人の顔についても同様である。たいていの人もそうだろうと思う。ところが、最近その自信が大いにゆらいで、考え込んでいる。

というのは、例の浅田農場の鶏インフルエンザ騒ぎでの、テレビにクローズアップされた浅田社

長の表情である。事件が起こって当初の社長の顔付きは、まったく木訥で真面目な農民の表情だった。これは嘘じゃないな、と私は直感していた。ところが、そのやったことは、素人が見てもすぐ分かるような、ごまかし、インチキではないか。——これはいったい、どう考えたらいいか。その後しばらく、私は一人で、考え込んでいる。

世の中には、しごく真面目な顔付きで嘘をつく人がいるのだ、と改めて気がつくべきなのか。

あるいは、およそテレビに映る人の表情には、普段の表情とは別の、一定のテレビ枠みたいなものがある、その枠の中で人は現れてくる、ということなのか。

テレビ表現における真実——難しそうにいうと、そんな問題に、しばらく悩まされそう。

### 第 13 回 (2004 年 3 月 17 日) 刑事被告人の子供も同罪か！

和光大学が、刑事被告人の子供の入学を拒否したという。日本は、近世の封建時代に逆戻りしていたのか、と私は思った。

あの頃、キリシタンは犯罪人で、その血筋の者は、「類属」として代々、その生涯監視付きになった。犯罪者の血筋の者は同罪である、怪しい、というのは、個人を血筋によって判断する封建社会では当たり前のことだった。現代日本も、その文化伝統を受け継いでいる。

大学という知識人の集合体で、血筋による差別のようなことが平然と行われているのだから——恐ろしい！ 情けない！

今から 150 年前、J. S. ミルの書いた『自由論』は、社会の支配的な勢力とか、世論によって抑圧される個人の自由を説いていた。この本は、明治の始め以来日本にも紹介されているが、その頃以来、どうもあまりよく理解されていない。「自由」と言えば、権力に対する政治的自由の方面ばかり語られる。

しかし、今日の日本で、おそらくもっと重要なのは、150 年前のイギリスのような、社会的な勢力からの「自由」ではないか。

社会的に差別されるのは、常に少数派である。少数派や個人の人権こそ、現代日本の課題であろうと思う。

和光大学の責任者は、学内の学生の動揺というような心配を理由に挙げている。それこそ「自由」の敵になる多数派、支配的勢力である。

大学は、そういう学生がいるなら、「個人」の大切さを教えて、若者たちを導かねばならないはずであろう。

### 第 14 回 (2004 年 4 月 28 日) 次の日本への期待

最近、NGO, NPO に参加している人たちに出会うことがある。ああ、こんな若者たちが日本にもいるんだ、と嬉しくなっていた。

そこで、例のイラクでの人質事件で、バッシングが起こっているというニュースである。最初私は、このバッシングは、政府寄りの特定集団が申し合わせてやっつてることだ、くらいに思っていた。しかし、事の成り行きを見ていると、どうもそうではない。

私もようやく気づいてきた。そう、これは日本人多数の伝統的心情の現われなんだ。こういう場合、女性週刊誌の取り上げ方で分かる。人々は、誰か変わった事をする人が現れると、とに

かく足を引っ張る。その人が目指している方向よりも、まず「みんな」と歩調があっているかどうかで評価を決める。日本人の目は横についている、と私は思ってきたのだった。

しかし、まだ少数派かもしれないけれど、すがすがしい顔付きの若者たちが、あちこちから現われ始めている。次の時代の日本は、こういう若者たちが変えていくのを期待しよう。

#### 第 15 回 (2004 年 5 月 28 日) 拉致問題を問う

拉致問題の取り上げ方が、このところどうもおかしい。騒ぎすぎである。テレビ、新聞は毎日大々的に拉致被害者の動静を伝えている。

確かに、ひどい目に会った人たちである。私も心から同情する。しかし、その報道は、客観的に見て、バランスを失って騒がれている。

ジャーナリズムばかりではない。政府も、役人や政治家が、委員会を設けて、いちいち対応して動き回っている。政治のバランスも怪しい。

かつて植民地朝鮮の支配者日本は、朝鮮の人たちに、もっとひどいことをやっていた。拉致は当たり前で、暴行も殺人もたくさん行われていた。今も、北朝鮮、韓国の人たちが言っているとおりである。

まあ、それは半世紀以上も前のことであるが、イラクでは、今も毎日、市民たち、子供たちが、拉致どころか、無惨に殺されている。そういう結果を引き起こしている責任者のアメリカの軍事行動を、日本も援助して自衛隊を送っている。日本人であるか、イラクの人であるかによって、私たちの関心は、こんなにも違って、当たり前なのであろうか。

#### 第 16 回 (2004 年 6 月 11 日) 情けない！ われらの首相

テレビのホンの一瞬の映像が、時代の大きな流れを教えてくれることもある。

シーアイランドでのサミットで、小泉さんはいつもブッシュさんのそばにくっついてきたようだった。

そんな時、ブッシュさんは、ちょっと小泉さんを押しつけて、プーチンさんを招き入れていた。そんなにくっつかないでくれよ・・・と。

その間も、小泉さんは例のごとく、ニコニコし続けていた。

カメラは、その一瞬を見逃さなかった。その映像をテレビで見て、——私は情けなかった。日本人であることが情けなかった。

外交官古手の岡崎さんが、つい先日、テレビで語っていた。日本はアメリカにくっついていけば、五十年、百年は大丈夫だよ、と。何を言われようと、しっぽを振ってついていきましょう——残念ながら、そんな教えに忠実な人は多いらしい。一九四五年の敗戦以来、この国にはたくさんいた。

そうでない政治家や役人に期待していくしかないな。

イラク戦争以来、この欄で、アメリカのやり方をずいぶん批判してきたけれど、私は元来、アメリカは好きである。さっぱりとした気持ちのいい人たちの国だと思う。

あの国から学びたいことは、まだたくさんある。

しかし、学んでいけないこともたくさんある。

### 第 17 回 (2004 年 7 月 21 日) いい意味・悪い意味

人名漢字に、糞、屍、呪などが含まれているというので、話題になった。こういう文字は、どう見てもマイナスの語感であるが、言葉には、場合によって、プラスにもマイナスにもなるのがある。

論壇、思想界では、「帝国」という言葉が一時話題になって、いろいろな人がこの言葉で語っていた。19 世紀の「大英帝国」は、ローマ帝国をお手本としたいい意味だった。大日本帝国もそのマネで、いいつもりだった。レーニンの『帝国主義論』が出てから、それは一気に悪い意味になった。「帝国」について語る人は多かったが、いい意味だったのか、悪い意味だったのか、それによって、思想内容はずいぶん違ってくる。

日常よく出てくる言葉で、「女」という言葉には、私はよく引かかる。少しかしこまったような文脈では、どうも語感がよくない。教室で英文テキストの翻訳をしているときなどがそうだ。女の責任——どうもよくないな、女性の責任——これならよろしい、というような具合である。

それはおそらく、「女」が、妾とか不倫の相手などを指して使われた歴史からくるのだろう。

一般に、漢字二字を中心にした翻訳調の言葉は、いい悪いに関して中立的である。「女性」がその例である。翻訳語は歴史が新しいので、人間関係のしがらみに関わっていないからだろう。差別用語の言い換えに使われる言葉も、そういう翻訳調が多いようだ。

### 第 18 回 (2004 年 8 月 13 日) 憲法改正論議

近頃また憲法改正論議が盛んである。とくに九条である。

戦争放棄の条文に対して、自衛隊の存在、海外派遣の事実をどうみるのか。

確かに矛盾していると思う。

しかし、矛盾していてもいいのではないか。

自衛隊が存在し、ときに海外出兵の事実があるから、九条は空文なのだろうか。

そうではない、と思う。九条が厳然としてあるから、自衛隊は軍隊と名乗れないし、行動はいろいろ制約されてきた。政治家も国民の多数も、結果として、そういうあり方を認めてきたのではないか。

憲法の条文が現状に合わなくなったら、修正条項を付け加えていくというお手本はアメリカだ。その背景には、法律とか、およそ文書についての文化がある。合理主義の文化である。

文書についての、もっと違ったあり方の文化があってもいいと思う。タテマエは、事実が多少食い違っても、無効ではない。その解釈の幅の中で、指針として、理想として生き続ける。

日本文化のタテマエは、常にそうであった。多数民衆の賢明な知恵は、それを支えてきたのではないか。

憲法九条を改正しないで欲しい。

### 第 19 回 (日付不明) 侵略戦争とはなにか

リンク先になし

### 第 20 回 (2005 年 3 月 12 日) ライブドア対フジ

リンク先になし

## 第21回 (2005年5月2日) いのち

リンク先になし

## 第22回 (2005年5月15日) 靖国問題を考える

先日、日文研で、中国人研究者たちと雑談しているうちに、例の「靖国神社参拝は是か非か」が話題になった。

そのとき、私はこう語った。

日本人大多数の気持ちでは、あのA級戦犯たちが特に重大な戦争犯罪人であるのではない。率直に言って、あの戦争の責任者が誰であるかということは、はっきりとは言えない。

あのA級戦犯たちも、進んで戦争をやろうと言ったのではなく、「ああするしか仕方なかった。」のように言っている。

戦争の責任者の中心人物は、実は誰もいなかったのだ、私たち日本人は、何事につけても、まわりの情勢から、常に仕方なく動いていくのだ。このことは、政治学者の丸山真男さんも、否定的な口調ではあるが、「無責任の体制」と言っている通りである。

こういう道徳的風土から、人々は特定の人間を究極的に責めない。すべては水に流す、その気持ちは私にはよく分かる。これは、日本の伝統的な文化なのだ、と。

しかし、侵略戦争のような国際的な事件については、国際的な場では、こういう内輪の気持ちでは許されない。

戦争の被害を受けた人々にとって、その責任者は当然あるはずだ。

日本人はその歴史から、国際的な試練に乏しかった。

今や、その試練を受けとめなければならない時代に生きているのだ、と。

その場の中国人同僚たちも、この意見に賛成してくれた。

## 第23回 (2005年7月10日) 自衛隊を軽蔑してはいけない

日本の自衛隊は、今や実質上軍隊になっている。

この軍隊を構成する人間たちは、果たしてどこまで信頼できるのか。

軍隊というと、右翼とか侵略主義などを結びつけて考えるのは、戦前の日本の連想からであろう。世界を見ても、たとえばアメリカで、国際協調派に結構軍人が多いのをみても、結局、軍隊を構成する人間の質の問題だろう。

敗戦後、日本の知識人を中心として、自衛隊を軽蔑する風潮が広まっていて、その空気は今日にもかなり及んでいる。政府の組織の中でも、自衛隊の評価は決して高くはない。このままでいいのだろうか。

かつて、日本の軍隊に対する評価は、近代初期には高かったが、およそ大正時代以後、たとえば芥川の批評にも見られるように、日本の知識人やエリートの間では、軍隊は低くみられるようになっていた。

旧日本国軍隊の暴走は、力を持ちながら軽蔑されていたことへのコンプレックスがあったのではないか、と私は考えている。

たとえば、戦前、日本軍隊のエリートを育てる士官学校や海軍兵学校はどう見られていたか。当

時の日本の若者たちの目指すエリート的主流は、旧制高校・帝大で、陸士・海兵は傍系だった。当時の中学では、秀才たちは陸士・海兵を避けていたのである。

こういう事情は、正面切って語られてはいないが、当時の年配者に聞いて確かめた。

たとえば、近代の軍隊制度を作った西洋では、エリート階級出身者が軍隊の士官になるのが通例だった。

また、アジア・アフリカで近代化の先頭に立っていたのは、西洋の軍隊に学んだ若者が多かった。

これは日本にとって不幸なことだった。

日本の軍隊がお粗末だった事情は、こういうところによく現れている、と思う。志も、識見も、戦術もお粗末だった。

科学的・合理的思考に欠け、アメリカの合理主義に惨敗したのだった。

自衛隊に、日本の優秀な若者がおもむくようになること、そのような状況がうまれることを期待したい。

#### 第 24 回 (2005 年 10 月 28 日) 活字か、テレビか、IT か

先日、私は、「紙と活字の本はなくなるのか？」という題で小文を書いた。(『人文会ニュース 96 号』)。活字文化が IT 文化の出現で脅かされている現状を、いささか深刻に考えてみたのだった。

ところが、今ジャーナリズムでは、テレビ文化対 IT 文化の対立がしきりに話題になっている。統合できるか、いやそれは無理、というような話である。

人間文化を、表現媒体の進化の歴史として大きく捉えてみると、五千年くらい前の文字出現、それから五百年前の活字の出現、そしてテレビ出現、それはせいぜい五十年くらい前のことだったが、その後わずか十年ばかり前の IT 媒体の出現で、情報伝達文化が騒がしくなっている、という次第だ。

表現媒体の大きな変化は、表現内容を変化させる、というのは私の基本的な考えである。

否応なしに、私たちは今日の IT 媒体の影響力を承認しなければならない。

ところで、別の面から情報伝達文化を考えると、もう少し弱いけれど、抽象化の方向と、具体的人間関係重視の方向がある。つまり、西洋文化の抽象化と、これに対する私たち日本文化の具体性重視とである。

たとえば、株式会社で、株式を重視するか、社内の人間関係を重視するか、といった違いである。

表現媒体の進化は、基本的に抽象化の傾向である。私たち日本人は、この進化にいつも少し遅れながらついていく、ということになるのだろう。

#### (2006 年 5 月 29 日) 小泉さんの「心」

小泉さんはなぜ靖国にこだわっているのか？

それは「心」の問題だと言う。

その「心」の深層について述べたい。

小泉さんは、ブッシュさんの傍に一生懸命くっついていこうとしている。そのことは、サミットのとき、

「そんなにくっついてくるなよ」と押しのけられていた様子について、私も既にかいたことがある。それは広く知られているようで、アメリカでは、小泉はブッシュの sergeant (軍曹)とも言われているらしい。

他方で、彼は靖国参拝に頑固にこだわっているが、中国、韓国などからの非難を承知の上である。むしろ、それを望んでいるかのようでもある。

と言うのは、一方でブッシュさんにヘラヘラすることと、他方でアジアの国々に威張ることとは、裏表の関係で、おそらく無意識のうちに、小泉さんの中で、心理的なバランスが取れているのではないか、と思うのだ。

それは、実は、我々日本人の間に広く受け継がれてきた人間の上下関係の構図の現れであろう。

旧軍隊では、古参と新兵とのイジメの関係が、脈々と受け継がれていたと言う。今日でも、学生のサークルで、さらに一般に会社などの上役と部下との間などでも広く観察されるようだ。

私たちにとって、人々との平等な付き合いが難しいように、国際関係の場で、広く平等に付き合い合うことは難しい。

西洋崇拝とアジア蔑視とがワンセットになったその根は深い。

#### (2006年7月3日) 「権力」は必要なのか

最近、比較文明学会で、興味深い話を聞いた。

南米ボリビアに、近頃、古代文明の跡が発見されているという。文化人類学者の実松克義さんの報告である。

大きな人造湖や道路網、耕作地などの跡が広がっているが、巨大な建造物はないという。ホモス文明と名付けられているが、「文明」というと、たいてい中央権力の所在を示す建造物、それに付随して宗教的権威を示す神殿などがあるものだ。人間が集まって「文明」を築けば、その中心あたりに「権力」、「権威」が不可欠と思われているが、そういう権力、権威の中心を持たない「文明」があったのか、と考えられるらしい。

権力構造を持たない人間集団、そんなものはあり得るのか？ ——人間どうしのいがみ合いも、差別も、汚職も、戦争もないのだろうなあ。

今の世に生きてきて、つくづく羨ましい話である。

#### (2006年10月25日) 北朝鮮の立場も考えよう

北朝鮮は怪しからん！ 金正日は憎たらしい！

核爆弾は大変だ！ 今や未曾有の危機だ！

その気持ちは、日本人として私にもよく分る。

しかし、ここは頭を冷やして、今こそ相手の立場にもなって冷静に考える必要がある。

北朝鮮は、アメリカの核に、いつも取り巻かれている。

韓国や日本の港には、いつもアメリカの核を積んだ軍艦が出入りしている。

核ミサイルを積んだ潜水艦が周りをウロウロしている。

そのアメリカは、自分たちを「悪」の本拠と呼び、過去半世紀間、戦争状態が継続している。

日本人は、アメリカの核に全面的に寄りかかっているから、あまり気づかないが、その日本の基地も含めて、日本はアメリカとともに、北朝鮮を脅かし続けているのだ。

北朝鮮には、中国の核の傘がある、とは言っても、その中国との関係は、日本とアメリカとの関係とは違う。北朝鮮は、もっと自主独立の姿勢だから、中国の核をそれほどあてにはできない。自分たちを独立して守る準備がほしい。

ここはやはり、北朝鮮は、その唯一最大の敵対者アメリカと直接話し合うべきだ。

今、日本にできることは、その話し合いの呼びかけではないか。

#### (2006年11月24日) 「天の声」は談合ではない

私はかつて、談合は日本文化として認めるべきだ、と発言したことがある。今でもその考えに変わりはない。談合は事実として、日本中至る所の間人集団で現に行われている。多数決や投票などよりも遙かに歴史があり、根が深い。日本文化の「和」のよりどころである。

談合が悪いことになったのは、近代の始め、西洋の競争原理の法制を輸入して談合罪が法定されて以後のことにすぎない。

今日各県の知事や建設省などの周辺で、しきりに談合の罪が報道されているが、あれはたいてい官製談合で、業者の仲間同士の談合ではない。「天の声」という表現が適切に語っているように、話し合いではなく上からの命令みたいなものだ。

談合は悪いという世間一般やジャーナリズムの声に押されて、仲間同士の談合が抑圧されているお陰で、かえって「天の声」みたいなのがはびこるのだろう。

改めて、「天の声」などを排除した本来の談合をまともに認めるべきではないか。

もちろん、近代社会では、とくに特定業者間の談合には弊害もつきまとうだろう。たとえば一般消費者の保護というような問題が起こるだろうが、それはまた別に配慮していけば解決できるのではないか。

#### (2007年10月8日) 空気を読まない者

テレビで拝見している人物で、私は田岡俊二さんのファンである。

よく調べていて鋭い意見を述べている。

ところで、彼の喋り方を見ていると少し変わっていて、調子に乗ると、他の人や意見を無視して、一方的に喋り捲ることがよくある。こういうタイプの人には、反感を持つ人も居るかも知れない。

古い表現で「狷介(ケンカイ)」と言うのだろうか。あるいは今風に言えばKYということか。朝日に勤めていた人の意見によると、田岡さんはその能力の割りに冷遇されていたのだそうだ。

私じしん評論家を名乗ることがあるが、評論とは、危険なことを発言する仕事である、と心得ている。

critic(評論家)とは crisis(危機)を警告する者、critical(評論の、危険な)なことを言う者だ。その中心は権力に対して critical であることだが、とくに私たちの風土では、時代の「空気」に対して critical であることが重要ではないか。

多くの人々は空気を読んで行動し、空気を読めない者は、小学生から社会人に至るまで、イジメられるのだ。

世の中で、権力も空気も大事である。そうに違いないが、そう前提した上で、権力や空気に対して敢えて対峙し、批評する人間もいて欲しい。それが健全な社会のあり方ではないか。

### (2008年11月10日)「翻訳学」はなぜないのか

編集者から、私の肩書きを「何学者」としますかと聞かれた。

私の専攻は、英語で言えば translation studies で、日本語では「翻訳学」となる。数学の研究者は「数学者」、哲学は「哲学者」で通用するから、私は「翻訳学者」でよさそうに思う。——しかしどうもひっかかる。こういう肩書きは目にしたことがない。

なぜか？

日本には翻訳を理論的に研究している人はほとんどいない。他方、西洋では「翻訳学」がとても盛んである。西洋の翻訳学者が日本に来て、日本ではどうして翻訳研究がないのか、と不思議がる。翻訳書の出版では、日本はおそらく世界一なのだが。

翻訳の実務者の間では、translation studies はほとんど関心を持たれていない。著名な翻訳家山岡洋一さんは、translation studies は役に立たないと明言している。

大学では translation studies の研究者は少数だがいる。すなわち、翻訳についての実務と研究とが決定的に乖離しているのだ。

思うにこれは、日本文化の伝統的な特徴の表れでもあろう。

古代以来、学問文化は先進文明国から輸入すべきものであった。そしてこれに対して、伝統的な土着文化に根ざした学問も次第に起こってきた。たとえば近世の本居宣長などの国学である。そして国学は舶来の漢学と対峙しつつ、対立したまま受け継がれてきた。それは現代にも及んでいて、たとえば大学でも国語学と日本語学とが並存している。

こういう傾向は、見方によれば、ここから豊かな文化が育っているのだ、とも言えるだろう。

しかし、これは不幸をもたらすとも見える。

舶来文化が根無し草になる一方、伝統文化が鎖国的になる。

ここで、余談。

先頃、日本は侵略戦争をやったのではないと自衛隊の将軍が発言した。昭和の15年間、日本軍は中国軍と、もっぱら中国国内で戦争し続けた。日本軍の「侵略」は小学生にも分るはずだ。

昭和の初期にもこの将軍と同じような考え方の勢力の台頭があった。軍隊の青年将校たちの超国家主義は、やがて日本を戦争に導いた。

この人たちの思想の背景には、近世以来の「国学」があった。

同じような過ちの繰り返しを警戒しよう。

本題にかえて、

私は日本の翻訳や翻訳理論を、西洋の translation studies と対比しつつ考えていきたいと考えている。

まず、translation studies が日本で役に立たないという事情が分ってくる。translation studies の多くの研究は、英語を中心に考えていて、第三世界の研究者でも、英語への翻訳が中心テーマなのだ。

西洋文化圏の外で、しかも自国の中へ西洋文化を熱心に輸入してきた私たちのような例は、世

界でも極めて稀なのだった。

問題はここから始めねばならない。

**(2009年11月11日) 平成維新の条約改正を！**

岡田外務大臣も、北沢防衛大臣も、沖縄の基地を県外へ移転させることはきわめて難しいと言  
い、その前提から解決策を考えているようだ。

しかし、外交はそこから始まるのだ。

交渉相手の態度は動かし難い、そこから「外交」は始まるのだ。

日本近代史上の条約改正では、西欧諸国の態度はきわめて強硬だった。しかし、維新政府は、  
遂に二十数年かけて、改正に辿り着いた。西欧との関係を悪化させることもなく、思いを遂げたの  
だ。

日米対等の関係を唱える平成の維新政府よ、ぜひ、明治維新の先輩に学んでください。

**(2010年11月18日) まあま主義、賛成**

菅総理の評判が近頃よくない。とくに外交姿勢があいまいだと言われる。明快単純な主張を好  
むマスコミからは総スカンで、それで世論調査も散々の結果である。

明快単純な論理を押し詰めた先は、戦争か切腹であろう。日本伝統の武士道の論理である。

これとは別に、日本の庶民、百姓町人の文化には、いわば「まあま主義」というべき伝統があっ  
て、「あっちの言い分ももっとも、こっちの言い分ももっとも、まあま、そう固いことは後回しにし  
て・・・」というような論理があって、広く庶民の人間関係などに生きている。それは剛に対する柔の  
原理ともいうべきで、たとえば柔道はその典型で、近頃は国際化されて「剛道」めいてきたが、本来  
相手の力を利用する「柔道」であった。伝統的な建築でも、柔構造といわれる技術があった。外交  
の場でも、たとえば明石国連代表のカンボジア調停では見事な成果を挙げた。あれは「まあま主  
義」だった。あの時でも、調停の過程では、マスコミの評判はとても悪かったのを覚えている。

非武装平和の原則に立つ日本の外交は、基本的には「まあま主義」がふさわしいのだ、と私  
は思っている。

菅さん、外交でも内政でも、もっと自信を持って「まあま主義」でやってください。